

富士竹類植物園をみる

岡 村 は た

日本は世界的な竹の国である。多くの竹筥が日本において発生し、日本の地理的環境の多様性と相俟って多種多様に分化した。この豊富にある竹筥の系統を明らかにし、この多くの種、並びに栽培によって発見淘汰された数々の品種や型を保存し、また、本来の天性を生かして役立たせるのは日本人の義務であり、また事実、従来、自然、日本人の生活に縁の近かった竹筥について多くの人が各方面にわたって研究して来た。がしかし、これらの大部分は死んだものの、空間的、時間的な断片であって、真の竹筥の変異の性質をつかむ事はできなかった。標本室における標本の観察のみで、竹を同定する不確かさについては今更ここに私が長々とのべる必要もあるまい。このような所での標本の同定及び命名は、その個人の自己満足の外には出ないもので、いたずらに後世の人をまよわすものにすぎないものが多かった。また、利用方面からの竹筥の性質の研究もじっくりと腰をすえてかかってはじめて最もよい時期にこれを伐採し、最も適材（種類及び部分）が適所に用いられ得るのである。また、古来、日本人が愛好し、淘汰に淘汰を重ねた変りものを保存するにも個人がばらばらに所有していたのでは研究し、利用する上に価値がない。

そこで、それらを一箇所に集め、保存し、更に増殖させることが必要であり、それを完全に成し遂げるには、竹類ばかりを植える植物園が必要である。

しかし、竹は図体が大きく、また、変異に富んでいて、環境によって多種多様性を示すので、その種類としての特色を大巾に発揮するには充分な広さと時間とが必要である。それで、これらを多く集め、長年月の間、竹類生育に最適自然環境を保ち育ててゆくことは至難中の至難であった。しかし、日本の中央、富士の山麓の御殿場市、富士岡では、未だかつて誰もが成し遂げ得なかった、この有用な大事業が、前島麗祈先生御夫妻の長年の御努力と御熱意によって実現されているのである。

すなわち、富士竹類植物園がそれである。

無論従来もこうしたところみが全くなかったわけではなかった。多くの種類、または品種を同一箇所に集めて、サンプルガーデンをつくる事は東京、盛岡、岐阜などでころみられたが、すべて中絶の状態で、ヤブガラシのはうまま、ひどいものは掘りおこしてコン

クリート建てをたてたとか聞いている。大学や研究所においては特に、管理する人が代ると折角のコレクションも、最後の仕上げがなされないまま、時代とともにくずれてゆくのが自然のなりゆきであった。

しかし、ここ富士竹類植物園では、長年月の間変らぬ方針と熱意とを傾けつづけられた結果、ぼう大で、しかも特異で、有益なコレクションを展開しているのである。いま、その一端をのぞいてみよう。



富士竹類植物園の一部と、その園主
前島麗祈先生御夫妻

同園で最も注意をひいたのは、日本をはじめ、琉球、台湾のすみずみにいたる特産竹類がそろっていることで、特に珍らしく美しいものとしては、インヨウチク（島根県比婆山の特産）、スズコナリヒラ（兵庫、京都特産）、タイワンマダケ（台湾）、シカクダケ（中国原産）や、古い園芸竹類のあること。例えば1株から太い葉、細い葉、グリーンの葉、白条や黄条の斑入りの葉の出るハガワリメダケ、葉先から葉緑素を失うアケボノザサ、稈の半側が黄金色のキンメイチク、芽の上の溝側だけが白いギンメイハチクなどである。

これらの保存は、分類学上のみならず、我々の祖先が苦心してつくり、遺してくれた文化財で記念すべきものなので、何とかして日本の園芸界のために永久に子孫に伝えたいものである。

次いで特異な形態のものを拾ってみよう。

1. 葉が条のように細い リュウキュウチク
2. 稈に真赤と黄金条のある スハウチク、キンメイチク
3. 稈が四角で、節に棘の出る シカクダケ
4. 地下茎の出ない スハウチク、ハウライチク、ホウオチク

(227ページより)

5. 秋から冬に筍の出る カンチク
6. 緑したたるような葉をつける ナリヒラダケ、ヤ
ジャダケ、タイサンチク
7. 葉巾が広く、10cmの ジャコタンチク
8. 大葉で葉脈が白く透き通った チシマザサ
9. 葉に白条のある ヒメシマダケ、チゴカンチク、
スズコナリヒラ
10. 葉に黄条のある カムロザサ、キンタイザサ
などは特に注目に値する種類である。

当植物園は以上のように種類、品種が集められているばかりではなく、同一種類の多くの地方からのものが整然と整植されているのである。これは分類学上、地方的変異の研究に必要欠くべからざることで、整理すべきものは整理して同一名に帰すべきことがはっきりわかるし、この地方変異のなかにも重要なものもある。また、単なる生態型(エコタイプ)につけられた名についての吟味などもこのように、同一条件の下に管理することによってのみ解決できるわけである。

なお本園の整理に当っては、竹類分類に努力された

室井緯先生を顧問として、更に組織的に歩を進められ、今では、日本の原野、溪谷に散在している多くの野生の竹笹のうち、著しい特徴を有するものが殆んど同園を一巡することによって、見ることができるようになったのである。同園を見学される方は、特に世界のどこにおいても一度も栽培されたことのないアリマコスズ、カシダザサ、フジマエザサ、ゴテンバザサ、ヤリクマザサ、ヤマクマザサ、ギンタイチシマザサ、レイコシノ、アリマアズマザサ、オウサカザサ、オモエザサ、トクガワザサ等々、多くのものが整然と目前に植えられているのにおどろかれるであろう。

最後に、見学者は、御殿場線御殿場駅または富士岡駅で下車すると西側に大きな同園を発見することができる。また、見学者は10日か、2週間前に依頼しておけば、園主様が御案内下さることと思う。なお、見学は年中いつでもよいが、特に竹類の美しいのは春の出筍期の5月から11月である。

更に、くわしいことは当園発行の富士竹類植物園報告を御覧願いたい。